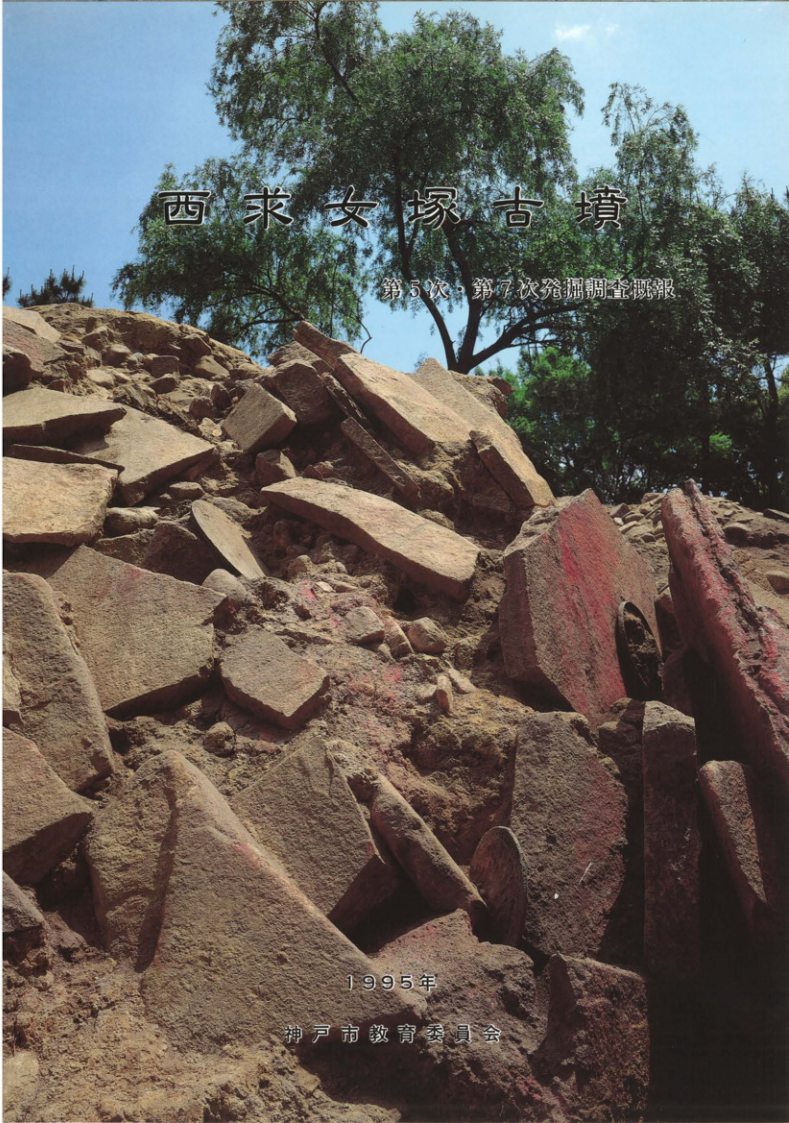


西求女塚古墳

第5次・第7次発掘調査概報

1995年

神戸市教育委員会

正誤表

	誤	正
ii頁17行目	楠章堂　楠木真紀子氏	楠章堂　楠本真紀子氏
ii頁29行目	京都大学助教授　清水芳拡	京都大学助教授　清水芳裕
13頁 1 行目	Ⅲ区	Ⅳ区
13頁 8 行目	Ⅱ区	Ⅲ区
13頁15行目	Ⅳ区	Ⅴ区
31頁写真キャプション	54. 棺庄粘土と礫床	54. 棺座粘土と礫床
37頁 8 行目	上号鏡	2号鏡
39頁 8 行目	上号鏡	2号鏡
40頁 8 行目	獣帯三画	獣帯三圏
41頁10行目	楠儒文	楠説文
54頁 1 行目	保存科学調査	保存科学調査
55頁右中写真キャプション	織物の糸径	織物の糸上本

序

平成３・４年と調査を実施した西求女塚古墳は、三角縁神獣鏡７面をふくむ12面の鏡や鉄製品などの大量の副葬品が出土したことで話題となりましたが、もうひとつ重要な発見がありました。いまから399年前の慶長元(1596)年、京阪神を中心に襲ったマグニチュード７クラスの大地震により、墳丘はあちこちで地滑りを起こし、石室が破壊されていたことです。同時に、鏡などの副葬品が盗掘や削平を免れたのは皮肉にもこの大地震によるものでした。

ご存じのとおり、平成７年１月におこった阪神・淡路大震災で、神戸市も未曾有の被害をうけました。震災直後から全国の皆様から寄せられました暖かいご支援に厚く御礼申し上げます。この度の震災では地域における人と人とのつながりの大切さが改めてクローズアップされるなど、多くの教訓も得られました。これらの貴重な体験を風化させることなく、次の世代へ引き継いでまいりたいと念じております。

この度、文化財として貴重な遺構・遺物とともに、過去の地震の痕跡について報告させていただきますことが、埋蔵文化財のご理解を深めていただくことになり、また、防災研究の一資料となれば幸いです。

最後になりましたが、調査ならびに本書の刊行にご協力いただきました関係各位に深く感謝いたします。

平成７年10月
神戸市教育委員会
教育長　小野　雄示

１．西求女塚古墳遠景（北西から）

例　言

1．本書は、兵庫県神戸市灘区都通３丁目１番に所在する西求女塚古墳の第５次・第７次発掘調査の概要報告書である。

5．発掘調査は文化庁国庫補助事業として、第５次調査は平成５年１月25日から平成５年９月10日まで、第７次調査は平成６年８月22日から平成６年12月16日まで神戸市教育委員会が実施したものである。

3．調査にあたっては神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部門）の先生方から御指導をいただいた。
各年度の構成委員は下記のとおりである。

平成４・５年度	檀上重光	大阪経済法科大学客員教授
	和田晴吾	立命館大学文学部教授
	細見啓三	奈良国立文化財研究所建造物研究室長
平成６年度	檀上重光	神戸女子短期大学教授
	和田晴吾	立命館大学文学部教授
	山岸常人	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部遺構調査室長

4．現地での発掘調査は、第５次調査は神戸市教育委員会文化財課学芸員　安田　滋・松林宏典・石島三和が担当し、第７次調査は安田　滋が担当した。また遺物の保存科学的調査については神戸市教育委員会文化財課学芸員　千種　浩が担当した。

5．本書の執筆は、千種、安田、松林、石島がおこない、編集は安田が担当した。

6．遺構・遺物の実測は調査担当者と調査補助員がおこなった。遺構の写真撮影は調査担当者と、神戸市教育委員会学芸員丸山　潔がおこなったものもあるが、多くは、奈良国立文化財研究所　牛嶋　茂氏、楠華堂　楠木真紀子氏に撮影していただいたものである。遺物の写真は牛嶋氏と楠木氏に撮影していただいた。繊維類の断面写真は岡田文男氏に作成・撮影していただいた。また、４号鏡背景の京都府城陽市芝ヶ原11号墳出土鏡の写真は城陽市教育委員会より借用したものである。同教育委員会　近藤義行氏のご協力を得た。

7．英文抄訳は神戸市教育委員会文化財課主査　渡辺伸行がおこなった。校閲はRobert Condon氏にお願いした。

8．本報告書作成にむけて自然科学的調査について下記の諸先生方に調査研究をご協力いただいている。今回の概報にも、その成果の一部を取り入れて報告している。記して感謝申し上げます。

（敬称略・五十音順）

日本土質工学会会員	荒井　仁	宮内庁正倉院事務所	成瀬正和
京都市埋蔵文化財研究所	岡田文男	奈良国立文化財研究所発掘技術研究室長	西村　康
橿原考古学研究所嘱託研究員	奥田　尚	福岡市教育委員会	本田光子
通産省地質調査所主任研究官	寒川　旭	奈良国立博物館客員研究員	松本包夫
京都大学助教授	清水芳祐	奈良国立文化財研究所主任研究官	村上　隆
立命館大学助教授	高橋　学		

9．調査中および遺物整理中には、多くの方から有益なご教示・ご助言を受けました。本概要報告ではご芳名を列記いたしませんが、深く感謝申し上げます。

10．現地での調査中には、地元灘南部自治会の方々にもお世話になりました。記して感謝申し上げます。

11．本書の挿図写真はスクリーン線数600線の精細密印刷をおこなっている。特に遺物写真は、拡大鏡等を使用しての観察も可能であるので試みられたい。

目　次

	頁
第１章　はじめに	1
第２章　西求女塚古墳の立地と周辺の遺跡	4
第３章　墳丘の調査	7
第４章　埋葬施設の調査	16
第５章　出土遺物	33
第６章　まとめ	63

2．西求女塚古墳遠景（北から）

第1章　はじめに

1．はじめに

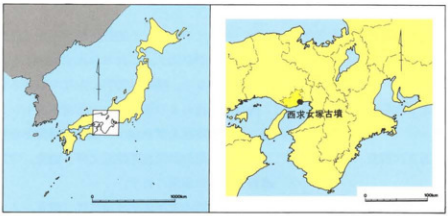
……むかしのことや。このへんに、菟原処女という、えらいべっぴんの娘が住んどったそうや。この娘を一目見ようとぎょうさん男が来よって、求婚する者があとをたたへんかった。そのなかに血沼壮士と菟原壮士という二人のええ男がおってのお、二人はえろう競うたが、なかなか決着がつかへんかった。娘は自分のことで二人の男が争うのに苦しんで、とうとう海に身を投げ自らの命を絶ってしもうた。それを知った二人の男も娘の後を追って海に飛び込みよった。残った親類縁者は悲しんでのお、三人を不憫に思うて真ん中に娘の墓を造り、その墓を挟んで両側に男の墓を作ってやったんや。それがこの塚なんや。……

古の　小竹田壮士の　妻問ひし　菟原処女の　奥つ城ぞこれ　（田辺福麿　万葉集巻９－1802）

語り継ぐ　からにもここだ　悲しきを　直目に見けむ　古壮士　（　同　　同　　巻９－1803）

万葉集をはじめ、大和物語や観阿弥作の謡曲「求塚」などで、語り継がれているこの悲恋伝説。その舞台のひとつとして、西求女塚古墳は、処女塚古墳や東求女塚古墳とともに、古くから知られていた古墳である。これら三古墳は海に近い街道沿いに位置し、往来の人々のなかには、古墳を前に袖を濡らす者もあったのであろうか。

西求女塚古墳は、旧海岸線から200mの、西郷川によって形成された扇状地の末端近くに位置する前方部を東に向けた前方後方墳である。古墳の周辺は早くから市街化され、明治の頃には個人の所有地となって別荘が造られ、池庭など豪奢な造作がなされていた。戦災に遇い、戦後は荒れ果てていたが、1964年に公園として整備され「求女塚西公園」として市民の憩いの場として利用されていた。このように、度重なる改変によってこの古墳は相当に破壊されているものと考えられてきた。



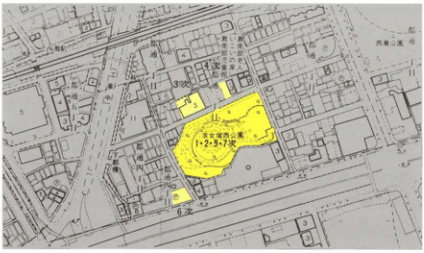
3．西求女塚古墳位置図

4．1934年頃の西求女塚古墳とその周辺

2．これまでの調査

1969年に夙川学院短期大学日本史研究会によっておこなわれた測量調査が、西求女塚古墳における最初の考古学的な調査である。この調査から、当初この古墳は全長約90mの前方後円墳と考えられた。

1985年度にはじめて墳丘内で発掘調査が行われた。この第１次調査以降これまでに、周辺部を含めて７次の調査が実施されている。



５．調査地位置図（S＝1/4000）

第１次調査（1985年度）　：後方部墳丘のトレンチ調査。墳頂部から崩れた埋葬施設と獣帯鏡（１号鏡）と山陰系の土師器出土。これらの出土遺物から築造時期は古墳時代前期であることが明らかとなる。墳形は後世にかなり改変されていることが判明。

第２次調査（1986年度）　：後方部墳丘および裾部と前方部墳丘のトレンチ調査及び北側くびれ部付近の調査。葺石の存在と墳丘盛土の後方部西側と北側への広がりを確認。

第３次調査（1988年度）　：後方部北側の共同住宅建設に伴う調査。中世の遺構・遺物が出土。古墳に伴う遺構・遺物は確認されず。

第４次調査（1989年度）　：前方部北側の共同住宅建設に伴う調査。スタンプ文のある壷形土器片と周湟の可能性のある落ち込みを確認。中世の遺構・遺物が出土。

第５次調査(1992・93年度)：墳頂部と墳丘斜面の調査。慶長の大地震(1596年)による墳丘の崩壊を確認。崩
（今回報告）　壊した竪穴式石室と鏡・鉄製品・山陰系土器等多数の遺物が出土。

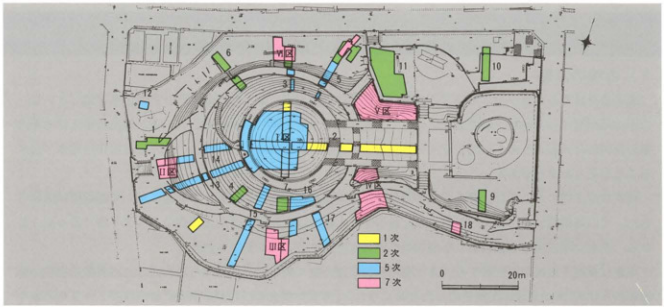
第６次調査（1994年度）　：後方部西側の事務所建設に伴う調査。周湟の可能性のある落ち込みと石敷き遺構確認。奈良時代の掘立柱建物址検出。奈良時代～平安時代の土器多数出土。

第７次調査（1994年度）　：後方部西側・北側裾部とくびれ部及び前方部南側の調査。後方部とくびれ部墳
（今回報告）　丘裾部の葺石基底石列を確認。墳形は前方後方形であったことが判明。前方部北側に張出状の施設の存在を確認。墳丘斜面から山陰系土器と布留式甕が出土。

3．第５次・第７次調査の経過

西求女塚古墳の所在する神戸市灘区味泥地区は、近年の都市中心地に共通するインナーシティの問題が起きつつある。そのため、町の活性化を図るために地元自治会が中心となって「21世紀の下町づくり」を計画し事業を進めている。そのシンボル事業の一つとして西求女塚古墳の復元整備が計画された。第５次と第７次調査は、その計画を進める上で、これまで明らかでなかった墳形・規模および埋葬施設の状況を確認するために、文化庁国庫補助金を得て実施したものである。

第５次調査　第５次調査は1993年１月25日から、墳頂部の調査を開始した。調査開始早々の２月４日、崩れた埋葬施設の石材の間から三角縁神獣鏡が出土した。２号鏡の出土である。並行して墳丘斜面の調査を実施し、墳丘盛土がずれている箇所が確認された。３月１日、寒川旭氏に現地を見ていただき、大地震によって起こった墳丘の地滑であることが判明した。この段階で３月28日に第１回の現地説明会を予定していたが、雨天のため近くの神戸市立西灘小学校でスライドを使った説明と遺物の展示をおこなった。４月に天井石の



6．調査区配置図

被覆粘土をはずし、5月20日天井石をクレーンによって引き上げた。5月から6月にかけて実測と写真撮影を行いながら石材をはずしていくと、次々と鏡が出土し、最終的には6月10日の11・12号鏡の出土をみた。6月後半には多数の鉄製品が出土し、鉄製品等を収める区画である副室の構造が明らかとなった。7月7日には副室内から碧玉製紡錘車形石製品が出土した。7月11日に第2回の現地説明会を実施し、埋葬施設と出土遺物を公開した。全国各地から約3200人の参加を得た。7月19日から22日にかけて副室内の遺物を取り上げ、板石もすべて取り上げたのち、北東部分の棺床と墓壙底の断ち割りを8月30日に実施し、翌31日には墳頂部での地滑り面の断ち割りを行った。9月10日に第5次調査は終了した。

7．第5次調査風景

8．牛嶋氏撮影風景

第7次調査　翌年の1994年8月22日から第7次調査を開始した。第7次調査では、5次調査で墳丘盛土の下層に礫群が見つかった後方部西端の裾部と、同じく5次調査の際、葺石の一部と思われる礫が検出された後方部南側に、最初に調査区を設定した。5次調査では幅2mのトレンチ調査だったため、正確なことが明らかにできなかったためである。後方部南側の調査区では、地滑りを起こした墳丘盛土の下から葺石の基底石列が現れ、また、くびれ部においても葺石の基底石列が確認され、これまで前方後円墳と考えられていたこの古墳が、前方後方墳であることと、前方部の規模が判明した。12月4日現地説明会を実施し、約320名の参加を得た。12月16日、第7次調査は終了した。

自然科学的分野による西求女塚古墳検討会　西求女塚古墳の調査では自然科学的分野に関しても、多くの先生方にご協力・ご指導をいただいている。5次調査の終了後に諸先生方にお集まり頂き、西求女塚古墳に関する自然科学的分野の意見交換会を催し、今後の分析についての検討を行った。

第２章　西求女塚古墳の立地と周辺の遺跡

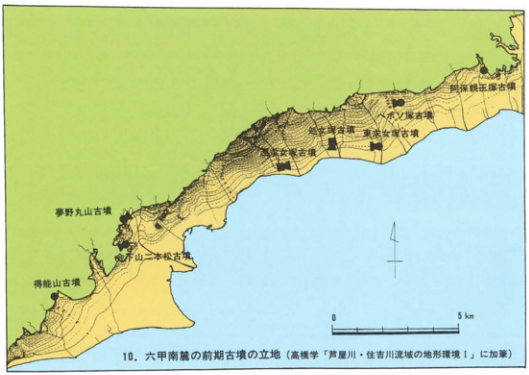
１．古墳の立地

現在の芦屋市から神戸市にかけての市街地の背後には花崗岩によって形成された六甲山系が迫っている。六甲山系南麓には花崗岩の崩壊土壌によって形成される、複合扇状地が発達している。風化の進んだ六甲山系の花崗岩は大雨ごとに土石流となって流れ出しこのような扇状地を形成する。土石流は海岸付近まで達することもあったようである。

西求女塚古墳においては、墳丘の断ち割り調査を実施した際に、墳丘盛土の下層において基盤層が確認された。その基盤層は河川によって運ばれた砂層や、人頭大以上の礫を含む土石流のボルダー層であったことから、西求女塚古墳は上記のような扇状地の末端に位置することが確認された。

現在は標高６ｍ付近に位置する。また昭和初期の埋め立て前の旧海岸線からは約200m、古墳築造当時の海岸線からは約100m前後の距離であったと考えられる。西求女塚古墳の約80m南側には高低差２～３ｍの海岸段丘が東西方向に延びており、この段丘上に立地する西求女塚古墳は海岸付近を航行する船からもその側面が、よく見えたことと思われる。

９．西求女塚古墳と神戸市街地（東から）



10．六甲南麓の前期古墳の立地（高橋学「芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅰ」に加筆）

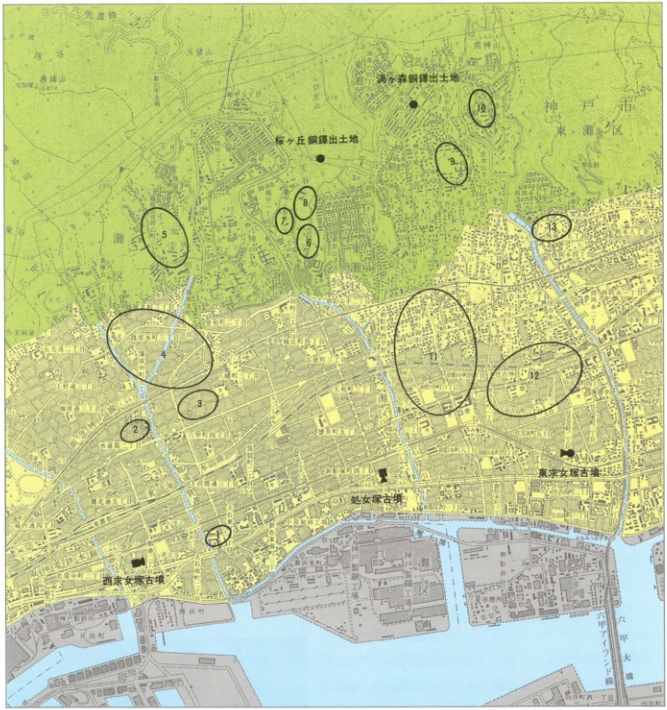
2．周辺の遺跡

神戸市の市街地から芦屋市にかけての六甲南麓には前期古墳が点々と築かれているが、これらは大きく２つのグループに分けることができる。１つは得能山古墳・会下山二本松古墳・夢野丸山古墳といった西半の六甲山系の丘陵部に築造された一群である。一方、西求女塚古墳以東の処女塚古墳・東求女塚古墳・ヘボソ塚古墳・芦屋市阿保親王塚古墳の東半の一群は平地上に造られた比較的大型の一群である。これらの古墳は、その立地で二つに分けられるとともに前者は三角縁神獣鏡を持たない小規模な古墳であるのに対し、後者は埋葬施設の調査が行なわれていない処女塚古墳を除く他の古墳から、舶載の三角縁神獣鏡や他の中国鏡が複数面出土しいる。墳形も後者は陵墓参考地のため詳細が明らかでない阿保親王塚古墳を除く全てが前方後円墳もしくは前方後方墳である。そのうち処女塚古墳は全長約70mの南向きの前方後方墳であり、スタンプ文を付した二重口縁壺や鼓形器台などの山陰系土師器が出土している。

11．処女塚古墳全景

12．東求女塚古墳全景

これらの古墳に伴う集落の実態についてはまだよくわかっていない。西求女塚古墳の近辺には古墳時代前期の大規模な集落址はなく、日暮遺跡や篠原南遺跡で竪穴住居址が数棟見つかっている程度である。この時期の拠点的な集落としてはヘボソ塚古墳と阿保親王塚古墳の中間の扇状地上に立地する森北町遺跡があげられる。ここでは大量の在地土器の他に河内・山陰・東海など、他地域からの搬入土器が出土している。



13.西求女塚古墳周辺の弥生・古墳時代の主な遺跡(S＝1/3000)

番号	遺跡名	時代	内容	番号	遺跡名	時代	内容
1	大石東遺跡	古墳前・中期	集落	8	滝ノ奥遺跡	弥生中期	集落
2	篠原南町遺跡	古墳前期	集落	9	赤塚山遺跡	弥生中期	集落
3	都賀遺跡	弥生中・後期	集落	10	荒神山遺跡	弥生中期	集落
4	篠原遺跡	弥生後期	集落	11	郡家遺跡	弥生後期	集落・古墳
5	伯母野山遺跡	弥生中期	集落			古墳前～後期	
6	桜ヶ丘B遺跡	弥生中期	集落	13	住吉宮町遺跡	古墳中・後期	集落・古墳
7	十善寺古墳群	古墳中・後期	古墳	14	西岡本遺跡	古墳後期	古墳

第３章　墳丘の調査

１．「慶長の大地震」の爪痕

第１次調査で、大きな窪みに落ち込んだ多くの板石が検出された。第５次調査においては、被覆粘土の付いた竪穴式石室の天井石が斜めになった状態で現れた。崩れた埋葬施設の全貌が明らかになると、埋葬施設は墳頂部が陥没して崩れ込んだことが判明した。また並行して行った墳丘斜面のトレンチ調査区でも、墳丘を断ち割ると盛土層が断層で階段状にずれている所や、墳丘盛土の下層が盛土を貫いて吹き上げている箇所が見つかった。以上のことから大地震によって墳丘が崩壊して地滑りを起こしたことが判明した。

この地滑りは墳丘の各所で起こったため、墳形は原形を留めないほど変形した。そのうち竪穴式石室を崩し、墳頂部で２ｍもの陥没を起こしている最大の地滑りは、石室のある後方部中央を頂点として北西から南東方向に緩やかな円弧を描きながら、墳丘盛土と地山を境にして起こっている。墳丘端に設定したトレンチでは、墳丘盛土の下層から16世紀後半の備前焼のすり鉢片が出土した。このことから墳丘盛土は地滑りを起こして古墳の周囲の土の上に覆い被さったことがわかるとともに、地震の起こった時期も16世紀後半以降であることが判明した。16世紀以降に神戸地域を襲い、墳丘の盛土を崩すほどの震動を与えた大地震といえば、1596年に起こった「慶長の大地震」が考えられる。この地震の際には神戸地域でも大きな被害があったことが記録（『言経卿記』など）にみられるとともに、神戸市内の遺跡の発掘調査でも度々、この地震の時に起こった液状化現象の痕跡が見つかっている。

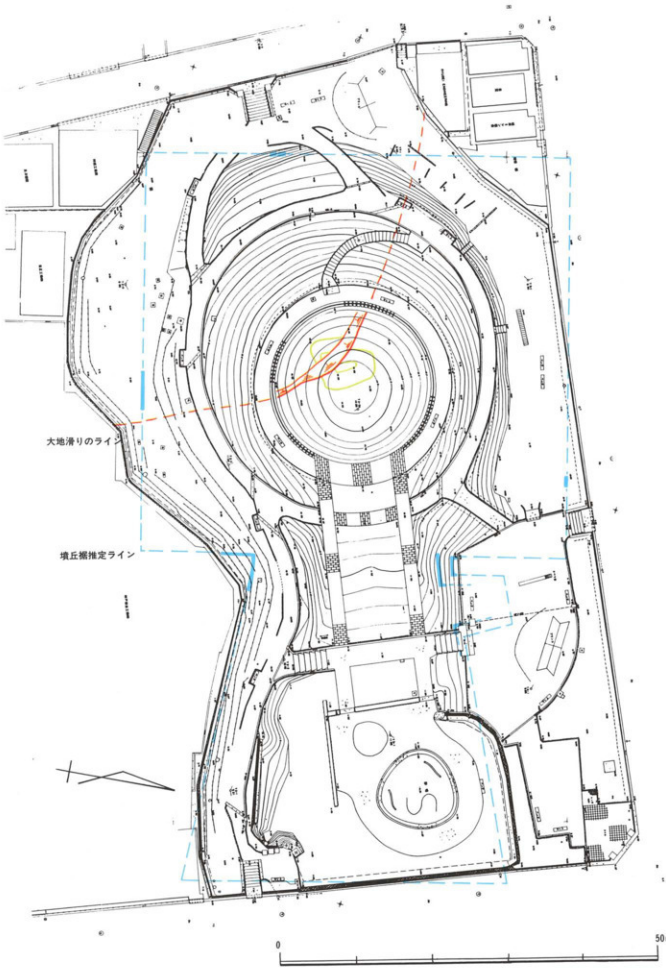
１．西求女塚古墳が造られる

２．墳丘の一部が崩れ、古墳の周囲が中世に水田となる。

３．1596年の大地震で墳丘が地滑りを起こす。中世耕土の上に墳丘盛土が滑る。中世耕土には急激に圧力がかかり覆った盛土を貫いて砂が上昇する。

４．墳丘が造作・削平され、公園となり現在に至る。

14．墳丘の現在までの経過



15．西求女塚古墳全体図

16．墳頂部の地滑りによる陥没

17．地滑りによる墳丘盛土の食い違い

18．墳丘を貫く墳砂

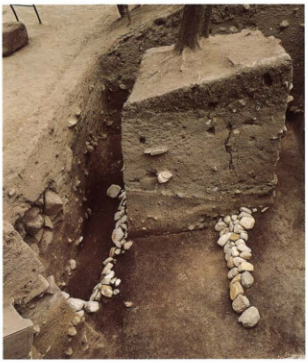
19．西求女塚古墳全景

2．墳形・規模

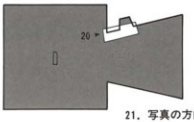
西求女塚古墳は、これまで前方部を東に向けた前方後円墳と考えられてきた。第７次調査における墳丘南側の調査区（Ⅲ区）で、地滑りを起こした墳丘盛土の下から一直線に並んだ最下段の葺石の基底石列が検出された。また南側くびれ部の調査区（Ⅳ区）でも基底石列が検出されたが、このくびれ部の後方部側の基底石列とⅢ区の基底石列の延長線は直交することから、この古墳の墳形は前方後方形であることが明らかになった。北側くびれ部の調査区（Ⅴ区）でも、くびれ部コーナーの基底石が検出され、南側のコーナーとは埋葬施設を中心にシンメトリな位置に存在することが明らかとなった。

前方部北側では墳丘裾から約80cm上で段築面が存在する。またくびれ部から前方部端方向に2.3mの地点で張出状の施設の存在が確認された。しかしその一部しか調査を実施していないため、張出部の全容は明らかでない。

くびれ部の幅は26mを計る。後方部北側の第５トレンチでも南側と対称の位置に基底石が検出されたことから後方部の幅は約56m、後方部の長さは約53mであると考えられる。前方部裾は未調査であるため明らかではないが、現在の公園の境界が墳形を表しているとすると、全長95m前後と考えられる。墳丘の主軸方向はN75°Eである。



20．北側くびれ部と張出部



21．写真の方向１

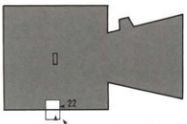
3．葺石

後方部南側（Ⅲ区）　後方部南側（Ⅲ区）で検出された葺石は、最下段の基底石列とその上１～２石の合計１～３石分、高さ30cm～60cmのみである。

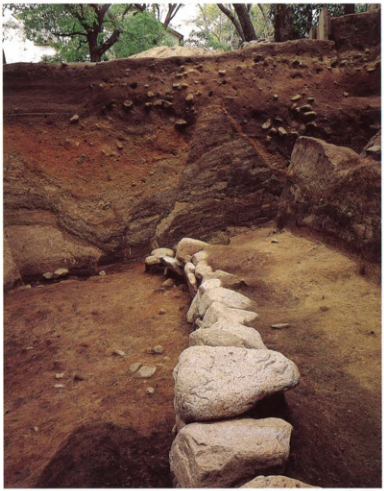
この１～３石は地山を掘り込んで据えられた部分であり、それより上部は墳丘盛土斜面に据えられていたため、墳丘が地滑りを起こしたことに伴って動いており、現在は残存しない。葺石を据えるための掘形は幅約50cmで、裏込めはシルト質の土のみで、栗石等は使用していない。

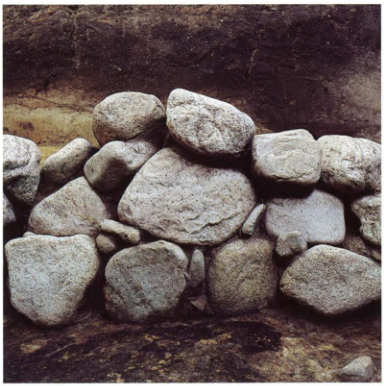
使用されている石は、基底石については最大長30cm前後のものが多く、２～３石目でも最大長30cm程度のものを使用しており、基底石とさほど変わらない。石材は主に花崗岩であるがその他の石も若干混じっている。しかし、いずれも六甲山系で産出される石であるため、付近の川原や地山中などから採取したものと考えられる。

石の積み方で特徴的な事としては、基底石は平らな面を前面に向けて縦長に据える石が多く、２石目３石目は小口面を前面に向けて使っている。また、大きい石と石の間には小さい石を詰めて、石を固定している。残存する３石目までは、ほぼ垂直に積まれており、石の大きさも３石目まではさほど変わらないことから、残存する部分だけを見れば、後世に築かれた石組のように見える。



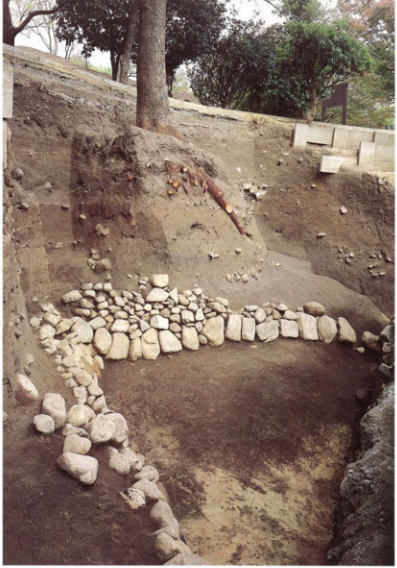
24．写真の方向２


22．後方部葺石基底石と地滑りした墳丘


23．後方部葺石基底石の積み方

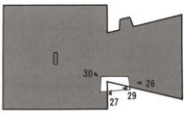
25．後方部南側葺石基底石列

26．南くびれ部後方部側葺石



27．南くびれ部前方部側葺石

くびれ部　南側くびれ部（Ⅲ区）ではくびれ部コーナーを挟んで、後方部側3.7m・前方部側4.2mにわたって葺石が検出された。但し、残存している範囲は少なく、墳丘裾部の葺石基底石から上に最大100cmのみで、それより上部は崩れて存在しない。くびれ部では、地滑りは起こっていないので、墳丘盛土と共に流出して崩れたようで、裾部には多くの礫と砂土が堆積していた。基底石は長軸40cm程度の大きさの石を使っており、それより上部の石は長軸25cm程度の大きさの石を使っている。石材はⅡ区と同様に花崗岩が主体でその他の石材も若干存在するが、いずれも六甲山系で産出される石材である。基底石の据え方は前方部側は縦長に据えているのに対して、後方部側は横長に据えている。一部では基底石と同様の大きさの石を２段目に使用している所が数カ所存在するが、２石目以上の多くは拳大から拳倍大の礫を小口を前面に向けて使用している。前方部側では基底石の裏込めに拳大の礫を使用していることが崩れた部分から観察できるが、後方部側では明らかでない。くびれ部における基底石の据え付けに関しては、どちら側を先行して据えられたかは、現状の外部からの観察では明らかにはできないが、２石目以上は前方部を葺いた後に後方部を葺いている。



28．写真の方向３

北側くびれ部の調査区（Ⅳ区）においては後方部側では、くびれ部コーナーから0.5m分と、前方部側では、裾部の2.3m分、上方の段では５m分と張出部の上段コーナーの葺石が検出された。基底石の据え方は南側の前方部と同様で、長軸を立てて据えているが裾部の基底石は南側より小さい石を使用している。上段の基底石は張出部との接続コーナーからくびれ部方向にむかって徐々に小さくなっている。

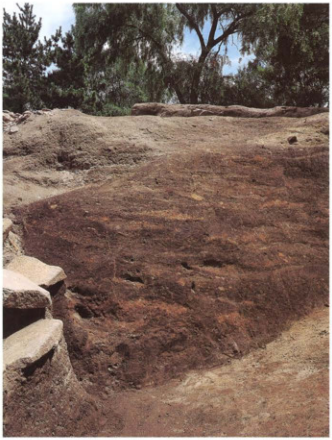
29. 南くびれ部後方部側葺石

30. 南くびれ部　全景

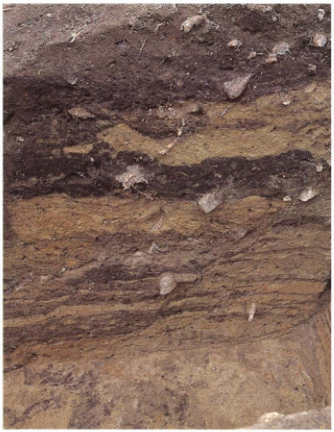
4. 盛土

後方部の墳丘部分は各トレンチで断ち割り調査を実施したが、前記したように地滑りによってかなり崩れているため盛土方法や盛土手順などを知る手掛かりを得ることは不可能であった。しかし、後方部各レベルで使用されている土に、特徴的なことがあることは判明した。

すなわち埋葬施設付近の墳頂部では、黒色シルトを主体に黄色細砂を若干挟んで、厚さ2～20cm程度の薄い層を何層も重ねて厚く積まれている。シルトを主体にしているため非常によく締まっている。墳丘中位から下位にかけては黒色砂層や黄褐色粗砂層が単層で30～70cm程度に厚く盛られている部分があり、それらの土は墳頂部のシルトを主体とする盛土に比して締まりは悪い。墳丘下位では黄色砂と黒色砂が厚さ数cm～10数cmで互層に盛られている箇所が多い。前方部に関しては未調査部分がほとんどのため現在のところ詳細は明らかでない。



31．墳頂部の盛土



32．後方部中位の盛土

33．後方部下位の盛土

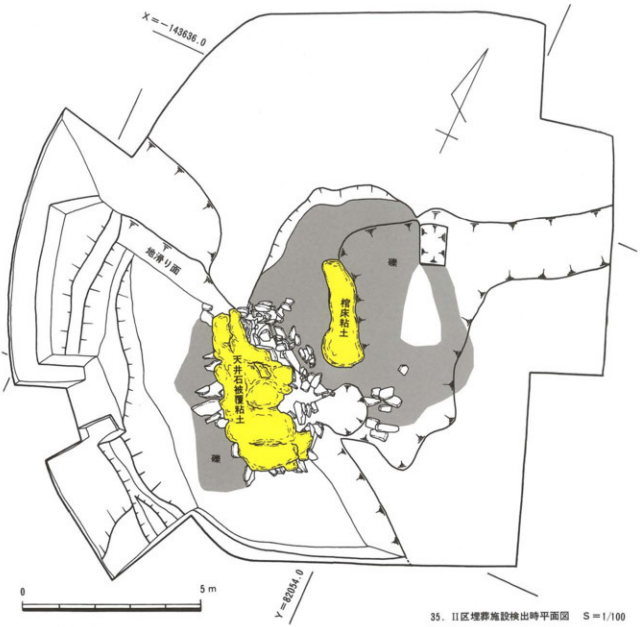
第４章　埋葬施設の調査

１．地滑りによる埋葬施設の崩壊状況

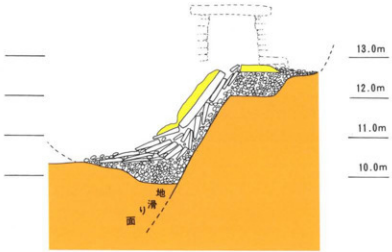
1985年度の第１次調査の際に、後方部の墳頂に設定したトレンチにおいて崩れた埋葬施設が見つかったことは前記したが、その状況をもう少し詳細に述べる。墳頂部では、公園造成時の盛土が表土下約1.3m存在する。その盛土層を除去すると拳大の礫群と黄色粘土帯と赤色顔料が塗布された板石群が現れた。板石群は西に向かって大きな窪みに落ち込んでおり、黄色粘土が付着していた。礫群上から獣帯鏡片（１号鏡）が出土し、板石の落ち込んでいる窪みの上層からは山陰系の土師器が多量に出土した。以上の点からこれらは埋葬施設構築材と考えられたが、幅２mのトレンチ調査であったためその構造は明らかにはできなかった。また黄色粘土帯上にはキャタピラの足跡が残っていたため、公園造成時に重機で窪地に押されて崩されたものと考えられた。

第５次調査では、この地点を中心に調査を実施した。調査を進めていくと板石が落ち込んでいる窪地は大きく広がり、その上層の黒褐色細砂層から、１次調査時と同様に山陰系土師器が多数出土した。窪みに堆積している黒褐色細砂層を除去すると、崩れた石室の石材とそれを覆う黄色粘土が、窪み全体に広がってきた。石材と粘土は窪みの壁に貼りつくような状態で存在した。これが地震による地滑りによって、墳頂部が陥没した為に引き起こされたことであると理解できたのは、全容が判明した後のことであった。目の前に崩れた竪穴式石室の全貌が現れると、地震の大きさとその威力に息を呑むほどであった。石室は墳丘主軸に直行して南北方向であるがその南西側の約1/2が斜めに切られて２m程落ち込んでいる。残った北西側も壁体は崩れたものと思われるが、後世に棺床面まで削平を受けたため石材はほとんど残っていなかった。

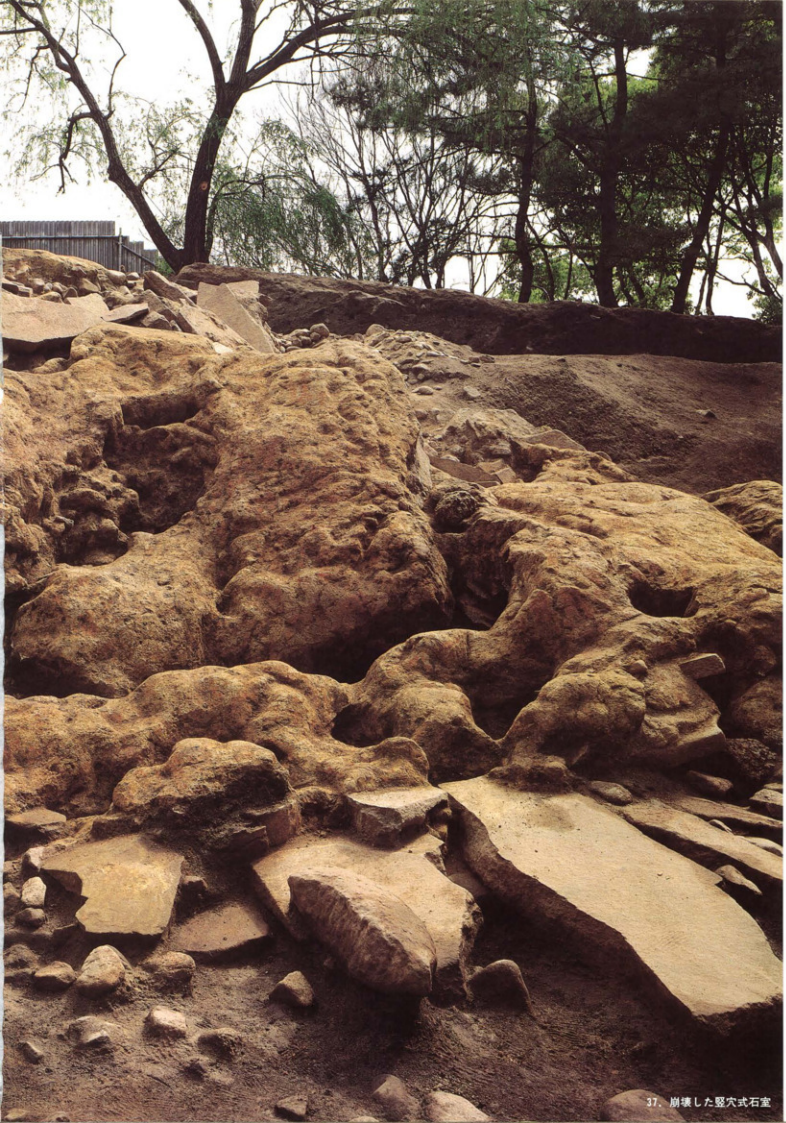
34．竪穴式石室崩壊状況（南から）



35．II区埋葬施設検出時平面図　S＝1/100



36．埋葬施設崩壊状況断面 模式図



37. 崩壊した竪穴式石室

38．埋葬施設その１（検出した状況）

２．天井石と被覆粘土

地滑り面に貼り付くように残っていた天井石は全部で５石あり、南北に並んでいる。南の２石は、ほぼ完全に残っていたが、北の３石は折れて割れている。最北の天井石は折れた残りの部分も残存しない。石材は最北の石は緑泥片岩で、その他の石は石英斑岩である。これらの石材は、この付近では産出されず、緑泥片岩は和歌山県ないしは徳島県のものである。石英斑岩は西求女塚古墳の約20km東を流れる猪名川を上流に約20km逆上った兵庫県川西市から川辺郡にかけて産出される石である。

39．埋葬施設その２（被覆粘土をはずした状況）

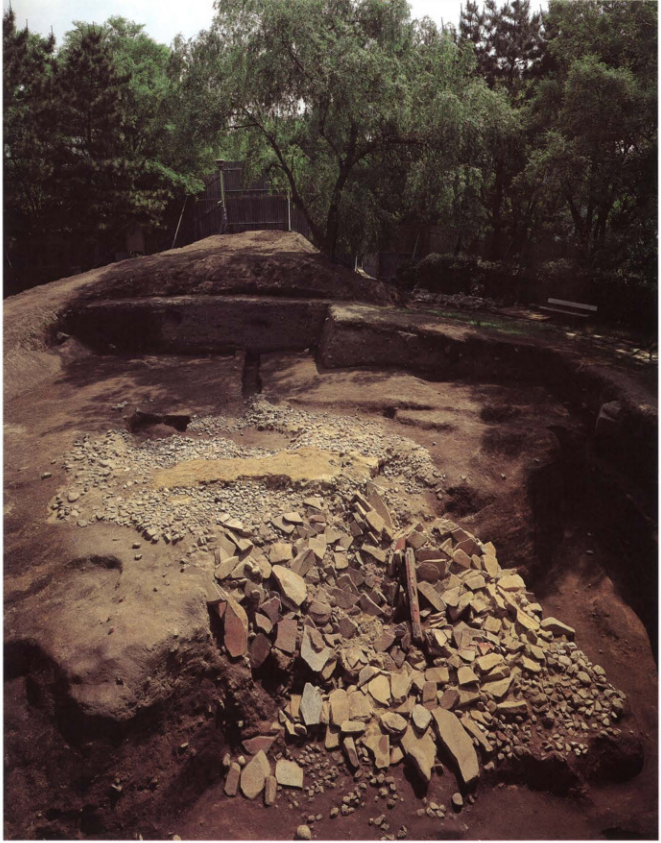
これらの天井石の大きさは、南の石から幅86cm×長さ(96)cm×厚さ14cm・51cm×(113) cm×12cm・51cm×(111)cm×10cm・79cm×170cm×13cm・86cm×157cm×9.5cmを計る（かっこ内の数値は残存長）。

全ての天井石は下面の全面と側面に赤色顔料が塗布されている。ただし下面の中央部では赤色顔料に汚れが少なく、両端には粘土が付着している。下面中央部の赤色顔料の鮮やかな範囲は、いずれの天井石も幅約100cmを計り、これが石室の天井部での幅を表していると考えられる。反対に、天井石下面の粘土の付着した部分が壁体に掛かっていた部分と考えられ、その幅は両端共に20～30cmを計る。

それぞれの天井石には黄色粘土が表面を覆っていたが、これは天井石上の被覆粘土である。被覆粘土は天井石の全体と、側壁最上部の石の一部を覆っていた。後述する棺床粘土と同質の粘土を使用しており、ほとんど礫を含まず非常に細かい粘土である。厚みは天井石の部分で15cmを計る。この被覆粘土からは、粘土採取地に由来すると思われるサヌカイト製の削器と、弥生土器片以外の遺物は出土せず、天井石上に副葬品の配置はなかったものと考えられる。天井石と天井石の継ぎ目の部分には、幅20cm・厚さ2cmほどの薄い緑泥片岩で上から被せた後から、粘土で覆っている。この緑泥片岩は、最北の天井石に使われている緑泥片岩とは若干、質が異なり、より軟質で層状に剝離しやすい石材である。

40．被覆粘土断面

41．天井石（西から）



42．埋葬施設その３（天井石をはずした状況）

３．石室の構造

先記した天井石５枚をクレーンで吊り上げて外すと、地滑り面の斜面から陥没した窪みの底にかけて、壁体と控え積みに使用された板石や礫や粘土・赤色顔料塊等が現れた。地滑りによって、石室は北西から南東方向に斜めに切られており、その南西側が陥没して、崩れ落ちている。しかし、崩れている石材を、徐々に外していくと石室の南東側1/3ほどは、わずかではあるが石室を組んだ状態のまま落ち込み、元の構造がある程度復元できる。

43．埋葬施設その４（副室の現れた状況）

残存状態から見ると、西求女塚古墳の埋葬施設は、墳丘の主軸に直行する南北方向の竪穴式石室であったことが、明らかである。その方向は、ほぼN25°Wである。特にこの石室の構造で特徴的なことは、南小口から75cmのところで１枚の板石を立てて石室の内部空間を区切り、遺体を安置した棺を埋納する主室と、副葬品を埋納する副室に分けていることである。壁体の石材はすべて輝石安山岩の板石で、板石の側面を内側に向け積み上げている。多くは長側面を内側に向けている。石室の内面にはすべて赤色顔料が塗布されている。

4．仕切り石と副室

仕切り石は、地滑り面に斜めに立った状態で検出された。元の位置では、1枚の板石によって石室内の空間を主室と副室に分ける壁のように、垂直に立てていたと考えられる。陥没した西側の壁体には、この仕切り石を挟み込むように、石が組まれている。また主室側、副室側の両面および上下の側面に赤色顔料が塗布されているが、塗布されている範囲は中央部の上端で幅84cm、下端で幅95cmのみで、左右両端は塗布されていない。これは、石室内の空間に表れる部分にのみ赤色顔料が塗布されていたことを示し、左右両端の各30～40cmは、壁体の中に組み込まれていたことを示している。

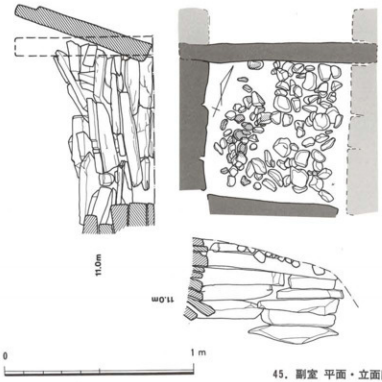
仕切り石の大きさは、横幅179cm・高さ81cm・厚さ10cmを計る。石材は天井石と同じ石英斑岩である。

また、赤色顔料の塗布されている範囲と仕切り石の大きさから、石室の内部空間のうち横断面の大きさが想定できる。それらから得られる石室の内法は幅約100cm、高さ約80cmである。

仕切り石より南の副室部は、小口部分と西壁が、ほぼ元の状態のまま落ち込んでおり、副室部分に関しての石室の構造がわかる。

副室部の床面には粘土床が敷いておらず、石室下部の礫床の上に粘土と礫を混ぜて敷き、その上にもう一度礫を敷いている。この礫には、上から赤色顔料が塗布され、その後に鉄製品を中心とした副葬品が埋納されている。

44．仕切石と副室



45．副室 平面・立面図

46. 仕切石（西から）

47．仕切石と副室

48．仕切石（南から）

49．副室西側壁

50．副室小口と
側壁のコーナー

副室の壁体は若干、石材の小口を石室内面に使用しているものもあるが、ほとんどは長側面を石室内面に使用している。また偏平な安山岩の板石以外に、１石のみ川原石が使用されていることが確認される。石室内面には主室と同様、赤色顔料が全面に塗布されている。

小口側は壁体の基底には小口幅の石を横長に２石積んでいるが、下の第１石目は先述した礫と粘土で埋まり、埋納行為完成時には礫に隠れて表れていない。小口側壁と西側壁とのコーナー部分の構築の前後関係は、西側壁を先に設置してから小口壁の石を設置したことが窺える。また、西側壁と仕切り石との構築の前後関係は、仕切り石は石室構築の最初から立てており、それに沿わせて壁体を積み上げている。

51. 側壁
裏込め断面

52. 南小口
裏込め断面

5．裏込め

壁体の裏込めには、壁体と同様の安山岩の板石と、花崗岩を中心とした円礫と、粘土・砂・土を組み合わせて使用している。安山岩の板石は、壁体の加重を後方に分散させるために長軸を壁体に直行する方向に使用しているものが多い。また後方にいくほど、控え積みに使用している安山岩が少なくなり、礫と砂・シルトを使用している。壁体裏の近いところでは控え積みの間に粘土を詰めている。一部では石材を使わず粘土のみを壁体裏に詰めている箇所もある。控え積みの後方では粘土を使わず、砂を板石の間に詰めている。円礫は副室の床面に敷いている礫や、後述する墓壙底に敷いている礫よりも大きめの礫を使用している。

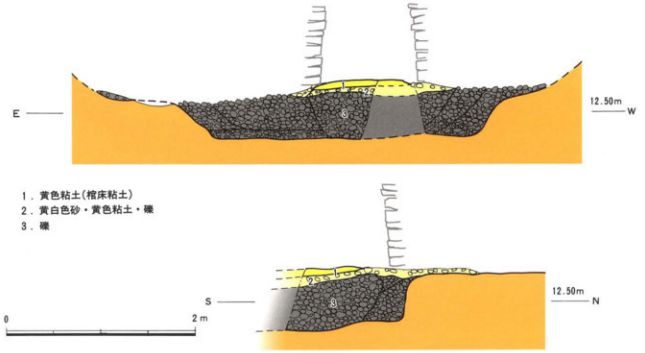
53．埋葬施設その５（粘土棺床と礫床）

６．棺床部と墓壙

墓壙の北東側は、後世に削平を受けて棺床面まで削られている。また、地滑りを起こした南西側は墳丘盛土が大きく崩れている。このため棺床面より上部の墓壙については明らかではない。墓壙底の中央部は、幅3.4m、長さ5.6mの範囲で１段深く掘り窪められている。深さは周囲の１段高い部分からは50cmを計る。この深底部分は陥没した南西側でも検出されており、壁体の残存している部分の下では、小口の壁体の直下から深くなっている。このことから深底部の南北方向の長さは、石室内法の長さにあたると考えられる。

54．棺床粘土と礫床（東から）

墓壙底には拳大から拳倍大の円礫が充塡され、先記の２段掘りの底からは56cmの厚さを計る。この礫床の上に黄色粘土を敷いて棺床としている。この棺床粘土の直上まで削平を受けているためこの粘土床の本来の厚さは不明である。残存する厚さは約10cmを計る。粘土を敷いた範囲は幅1.2m、長さ３mで、これは主室のみである。副室の床面の構造は先述した通り礫敷きのみである。粘土床の周囲にもう一度礫を敷き、その礫の上から石室の壁体を組み上げている。主室の仕切り石際には粘土床の上に厚さ５cmの板石を置き、その上面は赤色顔料が塗布されていた。この敷板石の上に鏡が置かれていた可能性が高い。



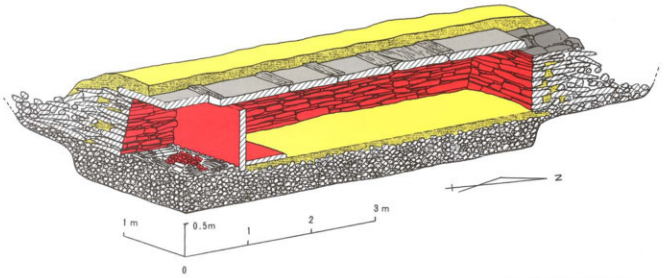
55．墓壙底断面図

56．墓壙横断面

57．墓壙小口縦断面

7．石室の復元

これまでに、調査の過程に沿って、石室の構築各部位についての説明をしてきたが、これらを総合するとある程度の石室の復元が可能である。石室の全長は、墓壙底中央の深壙部の長さから、約5.6mと考えられる。そのうち南小口から75cmのところには仕切り石を立てて棺を埋納する主室と副葬品を納める副室とに区切っていた。よって棺を埋納する主室の全長は4.75mであり棺の長さもそれ以下であることがわかる。石室の幅は天井石や仕切り石の赤色顔料の付き方から、約100cmと考えられる。高さは仕切り石の高さや、副室壁体の残存部から約80cmと考えられる。以上のことを鑑みて石室を復元すると下図のようになる。



58．埋葬施設復元模式図

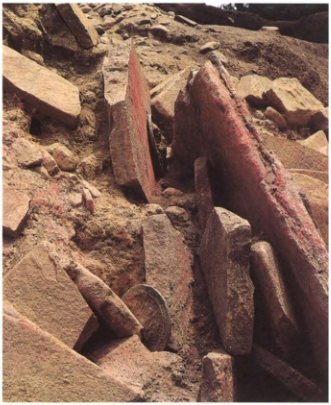
第５章　出土遺物

１．主室出土の遺物

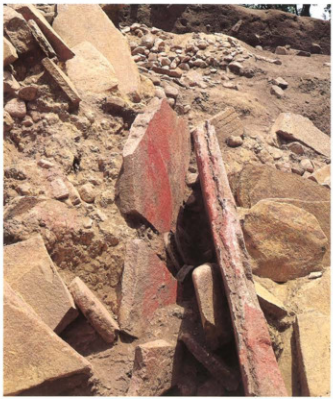
鏡の出土状況　銅鏡は破片も含めて12面分が出土している。すべて石室が崩壊した際に、石室の石材と同様にかなり動いて、原位置を保って出土したものはない。しかし、いずれも仕切り石より北側から出土していることから、全て棺の埋納されていた主室に置かれていたものと考えられる。１号鏡のみは第１次調査の際に出土したもので、それ以外は全て第５次調査で出土したものである。

出土位置は、１・４号鏡は、地滑り面より東の棺床直上または地滑りによって撹拌された土から、２・３・５・６号鏡は、地滑り面に貼り付いた石材の間から、７～12号鏡は、仕切り石と先述した敷板石の間の隙間から、それぞれ出土している。７～12号鏡はその出土位置と状況から、敷板石の上に置かれていた可能性が高い。その他の鏡は棺内に埋納されたのか、棺外に埋納されたのかは不明である。

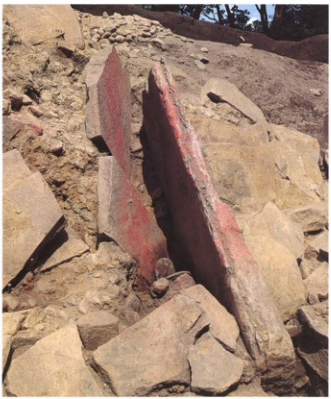
なお、鏡番号は出土順に付したものである。



59．６・７号鏡出土状況



60．８・９・10号鏡出土状況



61．11・12号鏡出土状況

62．鏡の出土位置

63．１号鏡

１号鏡（半肉彫獣帯鏡）

内区の一部の最大長6.2cmのみが残存する破片である。この鏡は、昭和60年度の第１次調査で出土したもので、公園造成時の盛土層と墳丘盛土の境で出土しており、原位置は保っていない。鈕座の内帯は、残存するのは２個の小乳と小乳間の３つの芝草文であるが、復原すれば、９個の小乳を配したものである。現存部分から見ると、小乳の間は全て芝草文で埋められていると考えられる。鈕座と内区の間は内側より細線・櫛歯文・素文凸帯・有節重弧文・素文凸帯・櫛歯文・細線となる。内区主文様帯は直径11mmの円座乳１個のみが残存する。乳間の獣像は残存していないが、以上の諸特徴より、７像を配した半肉彫の獣帯鏡と考えられる。類似鏡から残存部分より外側を復原すると、直径19.5cm前後の鏡と考えられる。

64．１号鏡拡大

65. 2号鏡

66. 2号鏡　獣像と草花文

2号鏡（三角縁吾作四神四獣鏡）

まとまって出土した鏡群のうちで最北から出土した鏡である。多くの破片に割れているが、ほぼ完全な形に復元できる。京都大学文学部『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』所収の三角縁神獣鏡目録番号（以下目録番号と略す）67番の鏡である。直径は22.4cmを計る。主文の配置は小林行雄氏の分類（以下の図像配置の分類は同様）のD類で、神獣像の表現は岸本直文氏の分類（以下の図像表現の分類は同様）の表現⑦にあたる。2対の神像と1対の獣像の間には松笠文があるが、1対の獣像の間には草花を模した文様を配している。銘文には「吾作明竟甚大好上有神守及龍虎身有文章口銜巨古有聖人東王父西王母渇飲玉飢(ママ)泬食棗壽如金石長相保」とある。同笵（型）鏡には出土地不明の泉屋博古館所蔵M25鏡がある。

67．3号鏡

3号鏡　（三角縁吾作三神五獣鏡）

2号鏡のすぐ南から出土した鏡である。この鏡も多くの破片に割れているが、ほぼ完全な形に復元できる。短剣または槍先が背面に付着して出土している。目録番号25番、小林行雄氏の同笵鏡番号（以下同笵鏡番号と略す）12番の鏡である。直径は22.5cmを計る。主文の配置はB類で、神獣像の表現は表現⑦にあたる。1号鏡に似た銘文「吾作明竟甚大好上有神守及龍虎身有文章口銜巨古有聖人東王父西王母渴飲玉泉飢食棗壽如金石」がある。鋳上がりは非常によく、図像は鮮明である。同笵鏡には京都府椿井大塚山古墳出土鏡・岐阜県（伝）可児市出土鏡・千葉県城山1号墳出土鏡と後述する西求女塚古墳出土の10号鏡がある。

68．3号鏡X線透過画像処理写真

69．４号鏡
（背景は京都府城陽市芝ヶ原11号墳）

70．４号鏡拡大

４号鏡　（三角縁吾作三神四獣鏡）

棺床粘土の南の地滑りによる撹乱土中から出土した鏡である。外区と銘帯の一部の4.8cmのみを残す破片であるため全体の文様は明らかでない。残存する文様のうち内区部分では、櫛歯文帯は斜行し、その幅は狭い。銘帯部分には直径８㎜の有心円文があるが、破片のため銘文部分は存在しない。類似の鏡としては、目録番号40番の京都府芝ケ原11号墳・兵庫県水堂古墳出土鏡がある。芝ケ原11号墳出土鏡と比べると有心円文の位置や櫛歯文及び外区の各文様帯のピッチと位置が同一の部分があり、同笵鏡と考えられる。

71. 5号鏡

5号鏡　（三角縁陳是作五神四獣鏡）

3号鏡のすぐ南西の地滑り斜面中位から出土した鏡である。一部ひびが入っているが完形で出土している。棺床粘土と考えられる黄色粘土に約1/2が埋まった状態で出土したが、埋納状態を表しているかどうかは明らかでない。目録番号59番の鏡である。直径は21.8cmを計る。主文の配置はA'類で、神獣像の表現は表現⑥にあたる。1号鏡に似た銘文「『君』陳是作竟甚大好上有神守『宜』及龍虎身有文章口銜巨『宜』古有聖人東王父西王母渇飲玉泉飢食棗長相保」がある。同笵鏡には兵庫県牛谷天神山古墳出土鏡がある。鋳上がりは悪く、図像には不鮮明な部分がある。また笵傷も多く認められる。

72. 5号鏡　鈕座から外区にかけての笵傷

73．6号鏡

74．6号鏡X線透過写真

6号鏡（画文帯環状乳神獣鏡）

5号鏡のすぐ南西の地滑り斜面下位の石材に挟まった状態で出土した鏡である。肉眼観察では完形であるが、レントゲン写真によると、大きくひびが入っている。

直径は15.4cmを計る。東王父・西王母・伯牙・黄帝の四神がそれぞれ獣の背に座っているのが描かれている。半円方形帯には13の方格があり、それぞれに4文字の銘文がある。銘文は全てが判読できていないが、「吾作明竟・幽凍三商・□徳出□・天王日月・天王日月・□□□□・□□臣□・□□□□・□□□□・□□□□・□□□□・□□□□・□至三公・興師命長」の銘文が認められる。鋳上がりは非常に良く、図像は鮮明である。

75．7号鏡

7号鏡　（神人龍虎画像鏡）

7号鏡から12号鏡は、先述した通り、仕切り石と敷板石の間から出土しているが、7号鏡はそのうちの、最東位から出土している。また鏡面を敷板石に付け、背面を上に向けた状態で出土した。

76．7号鏡　西王母像X線透過画像処理写真

直径は18.5cmを計る。鈕を挟んで神像と獣像がそれぞれ一対と、2神像の両側には仙人が描かれている。一方の神像の横には「大王公」の傍題があり、東王父を表している。対面の神像は西王母を表している。2頭の神獣は頭の上に角の表現のものと、耳の表現のものがあるので、龍と虎を表していると考えられる。縁の断面は三角形で、外区の文様は外から鋸歯文・櫛歯文・鋸歯文となり、三角縁神獣鏡と同様である。銘文は「田氏作明竟□□□有服者男為公卿女為諸王曽年益壽子孫番昌千秋萬歳不知老長宜賈市兮」とある。鏡面・側面・背面には、布が付着している。

77．8号鏡

78．8号鏡　X線透過画像処理写真

8号鏡　（三角縁吾作四神四獣鏡）

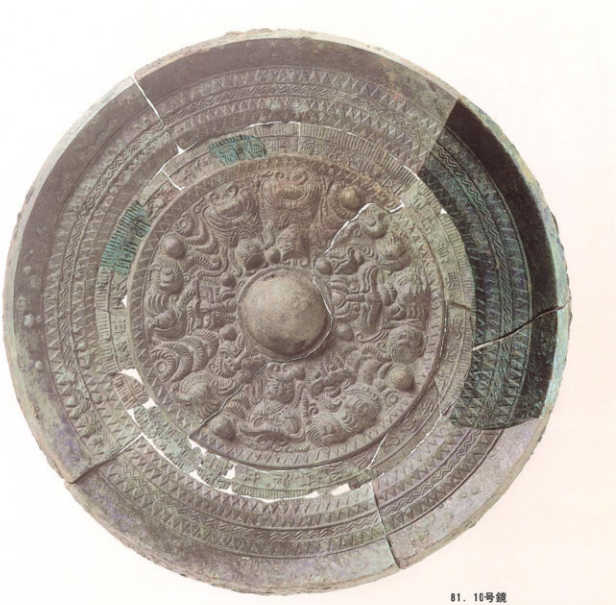
7号鏡の下の位置から、9号鏡に重なって、鏡面を上に向けて出土している。出土時は4つの破片に割れている。目録番号35番、同笵鏡番号19番の三角縁神獣鏡である。直径は19.8cmと三角縁神獣鏡の中では小型の部類である。図像の配置は2対の神像と2対の獣像がそれぞれ向かい合う配置Aで、図像の表現は表現①にあたる。銘文には「吾作明竟甚大工上有王喬以赤松師子天鹿其龚龍天下名好世無雙」とある。全体的に図像の鋳上がりは悪く、神像の顔の表情などは分かりにくい。鏡面には保存状態のよい、弾力性を保持した白色の布が付着していた。同笵鏡には福岡県石塚山古墳・広島県中小田1号墳・大阪府万年山古墳・京都府椿井大塚山古墳2面の出土鏡がある。

79. 9号鏡

9号鏡　（三角縁吾作徐州銘四神四獣鏡）

8号鏡と重なって、敷板石と仕切り石の間から、鏡面を敷板石側に向けた状態で出土した。この鏡は割れずに、完全な形で出土した。目録番号37番・同笵鏡番号20番の三角縁神獣鏡である。直径は22.4cmを計る。図像の配置は2対の神像と2対の獣像がそれぞれ向かい合う配置Aで、図像の表現は表現④にあたる。外区の文様は外から「鋸歯文・鋸歯文・鋸歯文」であり、三角縁神獣鏡の一般的な文様構成である、「鋸歯文・複波文・鋸歯文・鋸歯文」とは異なる。また圏界の櫛歯文は斜行する。銘文には「吾作明竟幽律三剛銅出徐州彫鏤文章配徳君子清而且明左龍右虎傳世右名取者大吉保子宜孫」とある。鋳上がりは良く図像は鮮明である。同笵鏡には京都府椿井大塚山古墳・奈良県佐味田宝塚古墳・岐阜県内山1号墳の各出土鏡がある。

80. 9号鏡　神像拡大



81．10号鏡
（背景は西求女塚古墳３号鏡）

82．10号鏡と３号鏡の銘帯の比較
（左　10号鏡）

10号鏡　（三角縁吾作三神五獣鏡）

外区全周の約1/5強と銘帯および櫛歯文の一部のみ残存する破片である。外区片は９号鏡のすぐ西側から、銘帯は、仕切り石のすぐ北側で、地滑り面の上方の板石下より出土している。銘帯は「西王母」と「飢食」の５文字のみ残存する。外区片は鋸歯文・複波文・鋸歯文・鋸歯文の各文様帯間相互のピッチの相関関係を調べると、３号鏡の銘帯「吾作明鏡～上有」の外側と同一であることが判り、また直径・断面の形状も同一であることから、３号鏡の同笵鏡であると認定される。また銘文もその字体や文字の大きさ、およびその書かれている位置から３号鏡の同笵鏡であることが判る。以上の点から、この鏡片は外区片と銘帯片との接点はないが、同一個体の破片で、目録番号25番・同笵鏡番号12番の三角縁神獣鏡である。

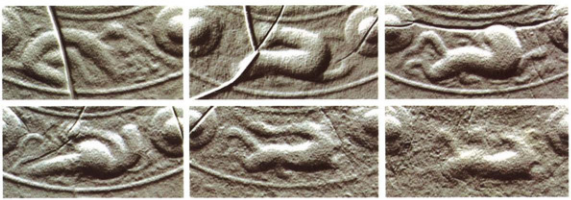
83．11号鏡

11号鏡　（画文帯環状乳神獣鏡）

敷板石と仕切石の間にまとまっていた鏡の一群のうち、12号鏡とともに、地滑り面の最下位から、鏡面を仕切り石側に向けた状態で出土した。完形である。直径は17.1cmを計る。図像は１匹の獣の背に神像が座るものを１単位として、４単位描かれている。神像の両脇には仙人が控える神と神鳥が控える神が交互に配置されている。神像の特徴からは、西王母と東王父の２神以外は明らかでない。半円方形帯には13の方格があり、それぞれに「天王日月」の４文字の銘文がある。方格の一部に笵傷のための図像の乱れがみられる。

84．11号鏡Ｘ線透過画像処理写真

85．12号鏡



86．12号鏡
主文様X線透過
画像処理写真

12号鏡　（半肉彫獣帯鏡）

直径は14.2cmを計る。鈕座は有節重弧文の内側に、８個の小乳とその間に銘文と芝草文を配したものである。銘文は「子孫」のみが判読できる。主文は六像式で、１人の仙人と５匹の獣が描かれている。全体に図像は不鮮明で、踏返し鏡の可能性がある。銘帯の銘文は「作鏡真大」のみ読み取れる。

87．出土直後の全出土鏡

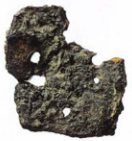
主室出土の鉄製品　鉄製品は、主室および副室から200点以上が出土している。大部分は副室に副葬されていたものである。これらは現在保存処理中であり、接合関係などが十分明らかになっていないため、総点数は不明である。今回の報告では形状の窺える主なもののみを紹介する。

主室側からは10余点の鉄製品が出土している。種類としては、短剣または槍先と小札革綴冑の部品と考えられる小札が出土している。これらは、板石の間に挟まれて出土しており、破損も著しい。

短剣あるいは槍先と考えられるものは、９点出土している。そのうち２点は３号鏡の背面と５号鏡の鏡面に銹着した状態で出土している。それ以外も、鏡の出土地点付近から出土している。特に２号鏡から５号鏡が出土した間でそのほとんどが出土していることから、これらの鉄製品は主室の中央寄りの南半に置かれていたと考えられる。棺内に副葬されていたのか、棺外に副葬されていたのかは明らかでない。

それぞれの木柄は、茎に銹着した部分のみが残っているにすぎない。89の左側２点は挿部が呑口式を呈している。X線透過写真により、左端のもので２個、その右隣のもので１個の目釘孔が確認されている。90は後者の挿部の拡大で、糸巻の状態を観察することができる。

小札革綴冑の部品と考えられる小札は１点のみ出土している。出土位置は地滑り面の中位で、５号鏡の付近から出土している。先端が欠損しており、残存する全長は2.2cmのみのため、全体の形は窺えない。残存部では幅２cmをはかり、革綴りの穴は７孔を数える。本来の全長は2.7cm前後と復元される。



88．小札　S＝3/2

89．主室出土の短剣・槍先（左端長さ19.3cm）

90．同左挿部

2．副室出土の遺物

出土状況　副室からは多数の鉄製品と碧玉製紡錘車形石製品が出土している。埋葬施設出土の鉄製品のほとんどは副室からの出土である。先述したように、副室部分の西側壁と南小口の壁体は、旧状を保ったまま滑り落ちている。そしてこの壁体付近の鉄製品は、埋納時の位置関係に近い状態のままでで滑り落ちたものと思われ、鉄製品の埋納状態をある程度、想定復元することができる。

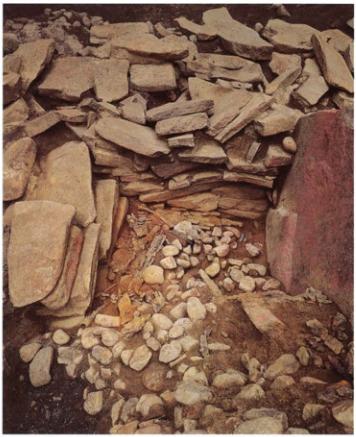
91．副室遺物出土状況（西から）

92．副室遺物出土状況（北西から）

副室内における鉄製品の配列は、以下の通りである。西壁付近では壁に平行して多数の鉄剣が切先を南に向けて置かれていた。この鉄剣の上には、やはり先を南に向けて鉄鏃が数本置かれていた。ここに置かれていた鉄鏃は三角形鏃と定角式鏃のみである。

小口付近では、壁に平行して鉄鉾・ノミ・鉄斧・ヤリガンナ等が置かれていた。ここ置かれていたものは鉄鉾を除き、工具類が主である。

東壁付近に置かれていた鉄製品は、短剣または槍先・鉄鏃が主である。しかし、東壁は崩れ、これらの遺物も先記の遺物とは違い、地滑り面の斜面に礫等と一緒に出土しているため、正確な埋納状態は不明である。ここに置かれていた鉄鏃は、大型の三角鏃・方頭鏃・無頸鏃である。鉄鏃は東壁でも仕切り石に近い所に、短剣または槍先は東壁付近中央から南に置かれていたと思われる。紡錘車形石製品も、東壁付近の南寄りに置かれていたと考えられる。



93．副室遺物出土状況（東から）

94. 鉄鏃（右下長さ10.5cm）

鉄鏃（94）　鉄鏃は現在確認できるものとしては、50本近くが出土している。そのうち無茎式のものが半数以上を占める。無茎式は大きく2種類に分けることができ、大部分は写真上段のようなタイプのものであるが、数点は鏃身部に対し刃部が短いものがある。いずれも目釘穴を持ち、逆三角形の抉りを有する。写真の4段目は方頭式で9本を数える。茎の部分に柄と結合するために巻かれた樹皮がのこっている。三角形式は10cm前後の大型のものと3cm前後の小型のものがあり、10本を数える。

95．鉄鉾・鉄刀・鉄剣（左端長さ32.4cm）

96．ヤリガンナ・ノミ（右上長さ5.4cm）

97．槍先・短剣（右端長さ14.1cm）

鉄刀（95中央）　破片で10点弱が出土しているが、全体が確認しうるのは１本である。崩れた板石の下敷きとなって折れ曲がっている。副室内のどの位置に置かれていたのかは明らかでない。

鉄剣（95右）　副室西側壁沿いに切先を南に向けて一束になって出土した。現状で10本が確認される。束の表面全体に布が銹着しており、布で巻かれて副葬されていたと思われる。現存長は各々40cm前後で、断面は杏仁形である。拵部が確認できるものは呑口式である。

鉄鏃（95左）　２点が出土している。長さは約30cmである。身部は断面四角形、袋部は断面円形である。切先は銹のため不明である。

槍先・短剣（97）　槍先ないし短剣と考えられるもので40本以上が出土している。幅2.5cm前後のものと3.5cm前後のものとがある。拵部はみな直線式で、木柄は茎に銹着した部分のみが残っている。副室北東隅付近で集中して出土している。

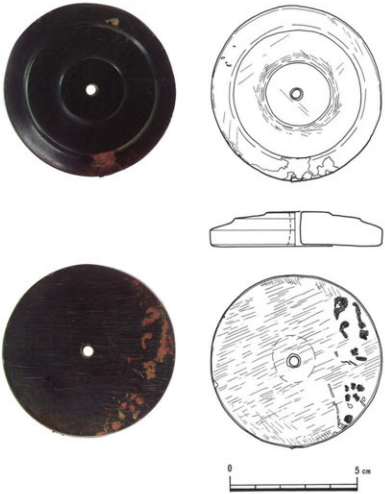
98．ヤス（左上長さ6.6cm）

工具・漁具　工具としてヤリガンナ（96左２本）・鑿（96右）・有袋鉄斧・短冊形鉄斧が出土しており、漁具としてヤス（98）が出土している。

紡錘車形石製品　地滑り面に貼りついた副室側の板石の下から１点が出土した。濃緑色の碧玉製で光沢をもつ。外形は正円ではなく、わずかに歪んでいる。上面での直径の平均値は6.8cm、厚さは1.4cm、重量は99.5gである。中央には直径0.4cmの円孔を穿っている。上面には２段の段が造り出されている。上面は丁寧に研磨されている。上面では段付近に同心円状に細かい擦痕が、下面においては全体に一方向の擦痕が認められる。周縁部は下面に向かってやや内傾している。下面は円孔に向かって若干窪んでいる。下面中央の円孔の周囲に長径1.8cm、短径1.7cmの不整円形の圧痕があるが、何によるものかは不明である。

円孔内には鉄ないし木製の芯は残存していなかった。周縁部には銹が付着している。出土時には付近に鉄製品はなかったが、もともと鉄製品の近くに置かれていたと考えられる。また、下面には布が付着している。鉄製品同様布に包まれていたのか、石室崩壊の際、朱とともに付着したものなのか定かではない。

当古墳から出土した石製品はこの１点のみである。



99．紡錘車形石製品（S＝2/3）　100．紡錘車形石製品実測図

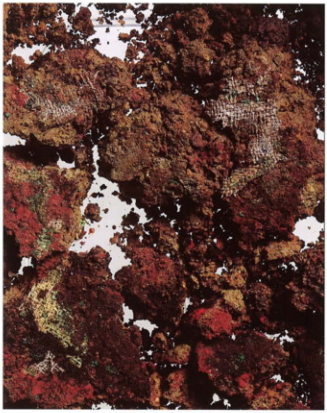
3．遺物の取り上げと保存科学調査

西求女塚古墳の遺物は、埋葬時の原位置を離れ、特異な状態で埋蔵されていたことは、これまでの説明で明らかである。このことにより、比較的多くの有機遺物が土壌中に残されていた。しかし、一度土の中から出ると、急激な温度の上昇、乾燥、強烈な紫外線といった苛酷な条件に晒されることになる。このことは、繊維などの有機遺物だけでなく、金属器にも大きなダメージを与えることになる。出土後すぐに取り上げれば良いが、それでは出土状態の記録が取れず、遺物から情報を奪うことになる。今回の調査では、出来るだけ迅速に出土状態の記録を行い、速やかに遺物を取り上げることが留意された。また、遺物を取り上げる際は、周辺の土ごと取り上げ、すぐに室内に運び、X線透過写真撮影を行って遺物を確認してから、顕微鏡下で遺物周囲の土を取り除いた。以下がこうして発見された織物や顔料である。

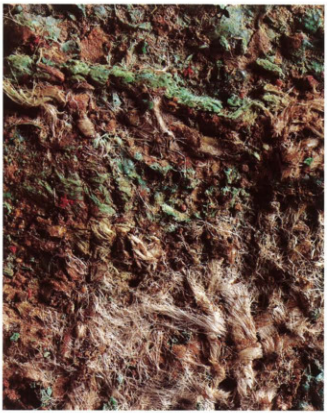
101．11号鏡出土状況

102．青銅鏡の取り上げ

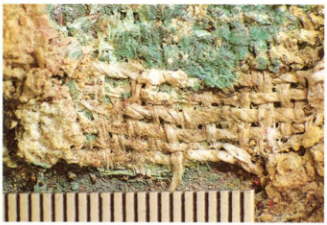
103．11号鏡鏡背付着織物　2種類の織物が付着している。繊維の太さも密度も異なっている。青銅鏡のサビや赤色顔料で変色している部分と、ほとんど腐食せず、当時の姿を止めている部分がある。



104．鏡に接していた土に付いた織物（９号鏡）



107．崩壊しつつある織物（８号鏡）



105．鏡付着織物（９号鏡）　×6.25

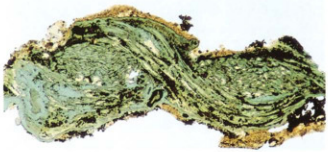
108．織物の糸体（８号鏡）　×25

106．鏡付着織物（９号鏡）　×25

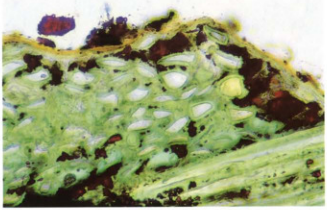
109．織物の糸が崩壊している（８号鏡）　×12.5

110．顔料やサビなどで変色した織物（12号鏡）×25

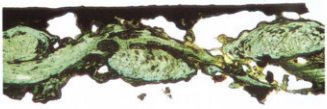
111．ほとんどサビに置き変わった織物（８号鏡）



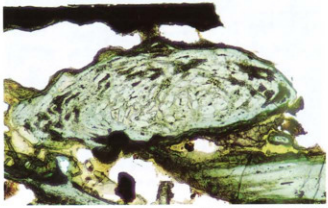
112．絹織物断面顕微鏡写真（７号鏡）×125



113．同左　拡大　×500



114．植物繊維の織物断面顕微鏡写真（９号鏡）×50



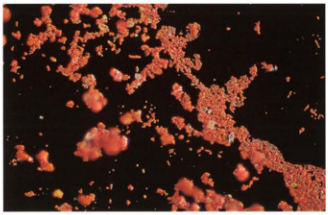
115．同左　拡大　×125

西求女塚古墳の青銅鏡や鉄製品には少なくとも２種類の材質の平織りの織物が付着している。このことは、これらの副葬品が、布や袋によって包まれたか、あるいは織物そのものが副葬品として、納められていたことを示している。今後これらの織物の材質や、密度や織り方などの織物そのものの調査を専門の研究者の協力を得て行い、付着状態の観察と合わせて、埋葬状態の復元の一つの手段になる可能性がある。また、これらの繊維がどこで作られたものかという事も今後の大きな課題である。

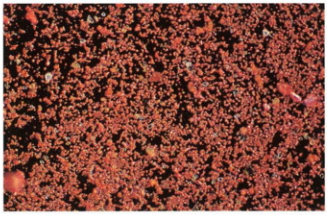
これら織物とは別の有機物として、鉄製品に付着した木質がある。そのほとんどはすでに分解しているが、鉄サビに置き変わった部分は辛うじて残っている。鉄鏃に残された矢柄、刀の柄、槍の柄などである。これらもその材質を調査することによって、多くの情報を得ることができる。

116．鏡面赤色顔料付着状態（9号鏡）

117．鏡背赤色顔料付着状態（7号鏡）



118．赤色顔料顕微鏡写真（9号鏡）×25



119．同左（7号鏡）×25

弥生時代や古墳時代の墓には何故か赤色顔料が多く用いられてる。しかし、すべての墓に用いられているわけではない。そこには、当時の信仰や社会関係の一端が見え隠れしている。

赤色顔料と呼んでいるものにも、幾つかの種類がある。西求女塚古墳でも2種類の材質の赤色顔料が使われている。今後、その使われ方について、各種の機器を用いた分析調査を行うことによって、石室作りから埋葬までの間の幾つかの儀礼での意識の違いや、入手方法の違いなどが判る可能性もある。

このように、遺物の材質や構造を調査することによって、多くの事実が明らかになる。しかし、そのためには後の調査や保存処置を想定した、現地での適切かつ迅速な対応が必要である。

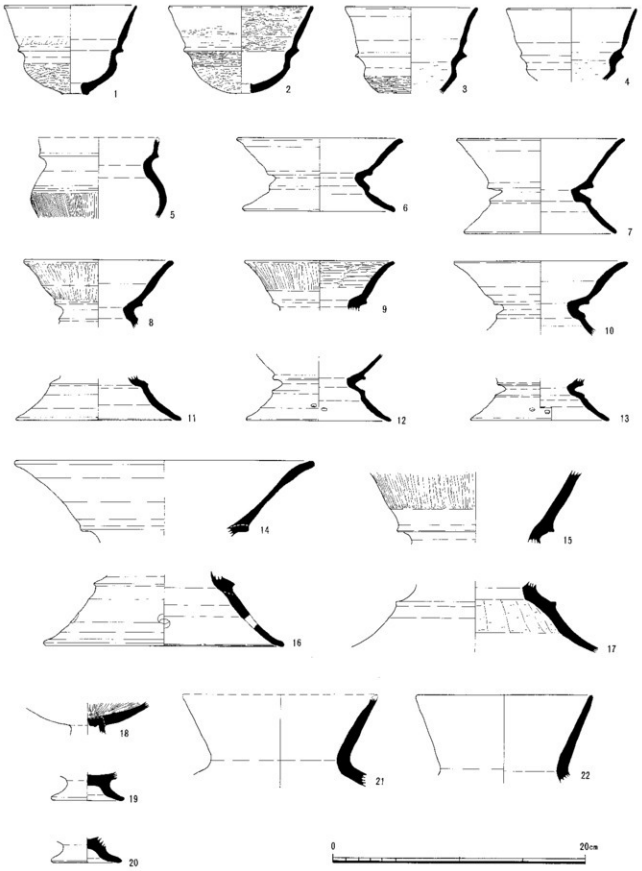
4．墳丘出土の遺物

墳頂部出土の土器　墳頂部では、墳丘の地滑りによって陥没した部分から多数の土師器の破片が出土した。それらの土器は全て破片で、窪地から出土しているため原位置は保っていない。しかし、それらの出土した層位は窪地の埋土の上層で、既述した竪穴式石室の天井石被覆粘土からは間層を挟んだ上の層から出土している。また、土器の出土した範囲は窪地の北端に限定される。以上の点から、これらの土器は本来、埋葬施設北半部分の上にあたる墳頂部に置かれていたか、埋められていたもの考えられる。

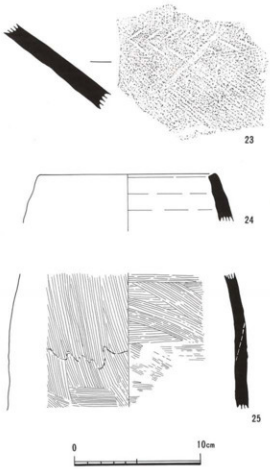
調査地は、現在公園として使用されており、その公園施設や樹木によって調査範囲に制約があったため、土器の出土する範囲を全掘していない。そのため、墳頂部にかつてあった全ての土器の器種や数は明らかでない。これまでに出土している器種は、大型の二重口縁壷・二重口縁小型丸底壷・直口壷・鼓形器台・低脚坏・高坏がある。これらのほとんどは、いわゆる「山陰系土器」と呼ばれているものである。

1～4は二重口縁小型丸底壷、あるいは坩と呼ばれるものである。口縁部と体部の境に嶺を持つこの器形は管見では他に類例がない。しかしその胎土や技法は後述する小型の鼓形器台と同様である。底部まで確認できる個体では底部に穿孔がある。内面に赤色顔料が塗布されているものもある。5も二重口縁小型丸底壷であるが、1～4とは器形が異なる。因幡地域に出土例のある器形である。6から17は鼓形器台である。口径12cm前後の小型で胎土も細かいタイプと、口径15cm以上の中・大型のものがある。18は高坏、19・20は低脚坏の脚部、21・22は直口壷のそれぞれ破片である。24・25の全器形は明らかでないが、山陰地方特有の甑形土器の可能性がある。26は大型の二重口縁壷であるが、接合点の無い口縁部・頸部・体部からの復元図である。口縁部と体部に半裁竹管によるスタンプ文がある。外面には赤色顔料が塗布されている。23も26と同様の壷形土器の体部の破片で、刷毛状工具による綾杉形の刺突文がある。

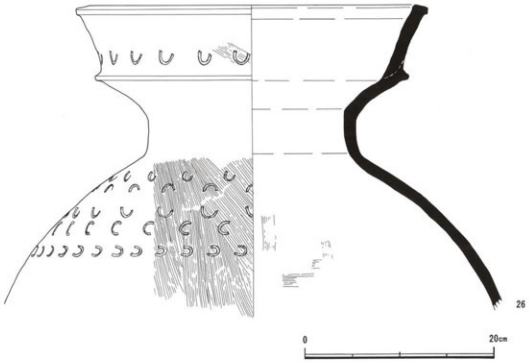
120．墳頂部出土小型丸底壷と鼓形器台



121．墳頂部出土土器　1



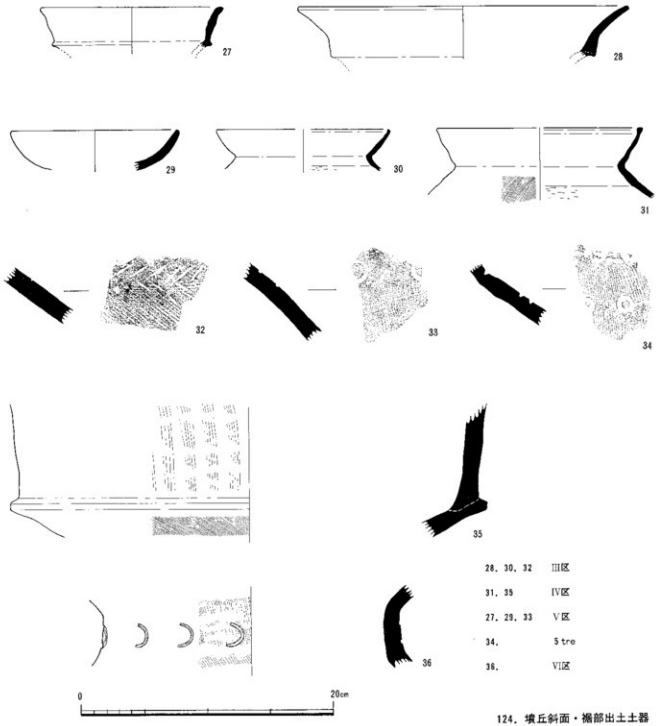
123．二重口縁　スタンプ文土器



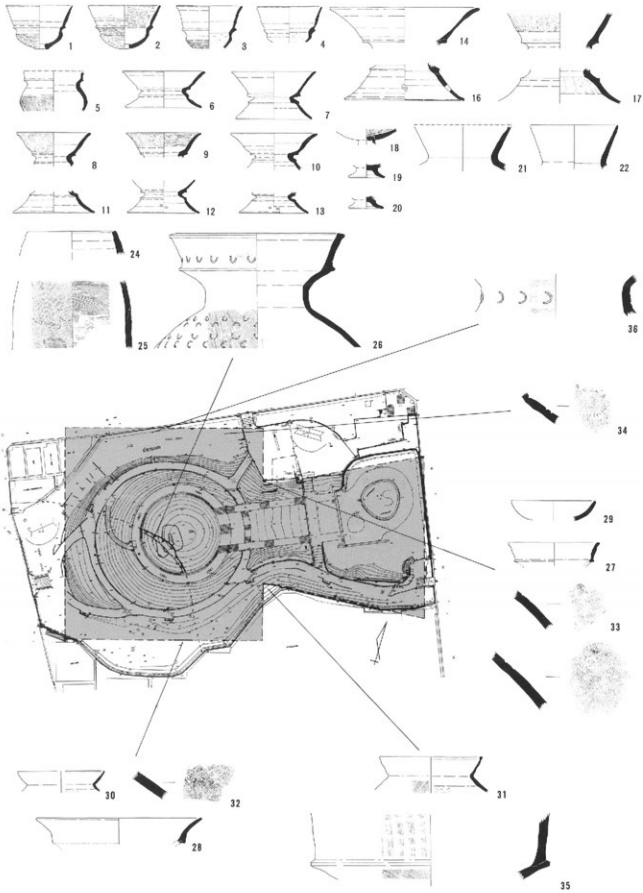
122．墳頂部出土土器　2

墳丘斜面及び裾部出土の土器　後方部とくびれ部の調査区のうち墳丘の斜面及び裾付近からも土師器片が出土している。それらはいずれも流土中から転落した葺石と共に出土しているため、本来は墳頂部か、斜面の段の部分に置かれていたものと思われる。またそれらは、1箇所に集中するのではなく、125に示したように各所から出土しており、墳丘上の各所に置かれていたものと思われる。

27・28は二重口縁壺の口縁部の破片、29は低脚坏の坏部である。32から36は大型の二重口縁壺の破片で、頸部と体部に竹管によるスタンプ文や刷毛状工具による綾杉形の刺突文が施されている。墳頂部で出土したものと同様に外面には赤色顔料が塗布されている。30・31は布留式甕の口縁部の破片である。小片で口径を復元することはできないが布留式の古段階に属するものであり、古墳の築造時期を知る重要な遺物である。



124. 墳丘斜面・裾部出土土器


1
2
3
4
14
5
6
7
16
17
8
9
10
18
19
21
22
11
12
13
20
24
25
26
36
34
29
27
33
30
32
31
28
35

125．土器出土位置図

第6章　まとめ

西求女塚古墳の第5次・第7次調査の概要は既述したとおりであるが、墳丘に関しては、前方部についてまだほとんど調査が行なわれておらず、また、出土遺物に関しても十分整理が行われていない。このため、西求女塚古墳の全貌は依然として明らかではないが、これまでの調査で明らかになった点をまとめると以下のとおりである。

墳丘　墳丘は慶長元（1596）年の「慶長の大地震」によって埋葬施設も含め、各所で地滑りを起こしており、もとの墳形を留めないほど大きく崩れていた。またその後も幾度となく造作が加えられ、墳形は大きく改変されていた。

調査の結果、墳形は前方部を東に向けた前方後方墳であることが判明した。全長は前方部端が未調査のため正確な値は明らかではないが、約95m前後と考えられる。後方部の1辺は約55m前後、くびれ部幅は26mである。段築は明らかでない。後方部の高さも墳頂部が削平を受けているため正確な値は明らかでないが、約7～8mと考えられる。前方部北側のくびれ部に近い所に北側に張り出す施設が存在することも明らかとなった。

埋葬施設　埋葬施設は後方部中央に墳丘主軸に直交する方向に竪穴式石室が造られていた。この竪穴式石室も地滑りで大きく崩れて原形を留めていなかった。南西側の約1/3が元の状態に近い形で約2m落ち込んでいた。南小口部分が残存しており、南小口から75cmのところに1枚の仕切り石を立てて、棺を埋納する主室と副葬品を埋納する副室に分けるという特異な形の竪穴式石室であった。残存部分から復元すると全長約5.6m、幅約1mと考えられる。

出土遺物　遺物は埋葬施設と墳頂部および墳丘裾部から出土している。埋葬施設から出土した副葬品は主室側からは、三角縁神獣鏡7面を含む舶載鏡12面と小札革綴冑の部品である小札および槍先または鉄剣が、出土している。副室からは、鉄鏃・鉄剣・鉄刀・槍先・鉄鉾などの武器類と斧・ノミ・ヤリガンナなどの工具類および漁具であるヤスといった鉄製品が多数出土している。これらの鉄製品とともに碧玉製紡錘車形石製品も副室から出土している。

墳頂部および墳丘裾部からは「山陰系土器」と呼ばれる土師器が多数出土している。器種としては小型丸底壺・鼓形器台・低脚坏・スタンプ文を施した大型二重口縁壺などがある。それらは墓上での祭祀に使用された土器と思われ、被葬者と山陰地方との関係をうかがわせるものである。墳丘裾部からは転落した状態で二重口縁壺等が後方部の各所から出土している。また、墳丘裾部から出土した布留式甕の破片は、この古墳の築造時期を決める手掛かりになるもので重要である。

築造時期　現状の調査結果では、出土した土器や、三角縁神獣鏡の型式などから西求女塚古墳の築造時期は古墳時代前期の古い段階に位置づけられる。但し古墳の築造時期を決める手掛かりになるものとしては、鏡や土器以外他にも、他の副葬品や墳形・埋葬施設の形状などもふくめて総合的に判断する必要がある。しかし金属器をはじめ、出土遺物の多くは整理が完全には終了しておらず、また墳丘に関しても前方部など未調査のため不明な部分が残っている。また埋葬施設に関してもその特異な形状から詳しい考察が必要である。今後、調査と考察を進めた上で、詳細な築造時期を探っていきたい。

最後に　西求女塚古墳の第７次調査が終了したちょうど１カ月後の平成７年１月17日に、未曾有の被害をもたらした阪神・淡路大震災が発生した。西求女塚古墳の墳丘を崩す程の大地震であった「慶長の大地震」から、奇しくも399年後のことであった。西求女塚古墳の周辺も震度７の激震地で、多くの建物や、鉄道や道路の高架橋が倒壊した。今回の地震では、西求女塚古墳にはほとんど被害がなく、震災後は避難者のテントを張るスペースとして墳丘の周囲が利用された。調査中は、「かつて、神戸でもこのような大きな地震があった。」と頭では理解できていた。が、それは遠い昔のこと、と他人ごとのように感じていた。しかし、大地の営みにとっては、この399年は、ほんの一瞬のことであり、今なお活断層によって降起し続けている六甲山系を背後に控える神戸は、まさに地震のメッカであったことが肌身をもって思い知らされた。前回の地震の爪痕が、約400年の眠りから覚めて我々の目の前に姿を現した直後に、今回の大震災が起こったのは偶然ではあるが、我々に忘れかけていた防災の心構えを訴えかけていたかのようである。

最後に、この度の震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被害にあわれた方々にお見舞いを申し上げ、一刻も早い復興を切に希望する次第である。

126．兵庫県南部地震直後の西求女塚古墳と周辺

SUMMARY

Nishimotomezuka tumulus is situated south of the Rokko mountains, on alluvial fans 6m above sea level and lies within the administrative district of Nada Ward in Eastern Kobe City.

Nishimotomezuka tumulus is a *zenpo-koho-fun*(a keyhole-shaped tumulus with a square rear mound), the forward square mound of which faces to the East. When originally constructed, it was situated some 100m from the coast. Seven surveys have been undertaken at this tumulus, and this report details the results of the fifth and seventh surveys undertaken by the Kobe City Board of Education.

The fifth survey was carried out between January and September 1993, for the purpose of investigating the burial structure and rear square mound, by trench excavation. As a result of excavations, the burial structure was found to be a pit style, stone chamber, whose axis is at right angles with the mound' s axis. The southern half of the chamber was fallen 2m down. It exhibits earthquake damage.There is evidence to suggest that a large earthquake (magnitude 7) collapsed the chamber in the end of 16th century. The northern half is also missing some of its stonework, due to modern demolition work.

The original dimension of the chamber has been estimated at lm width and 6m in length. The bottom of the burial pit was paved with round cobble stones, overlaid by a clay bed, on which was placed the wooden coffin.

A stone slab stood 75cm from the southern end of the chamber, separating it into a main room and a sub-room. The main room was used for the coffin and the sub-room for mortuary goods. Five, of a possible six, ceiling stones remain. The stones were layered with clay and the interior of the chamber was painted red. It is noteworthy that many of the stones used to construct the chamber had been conveyed from other regions.

Among the mortuary goods were bronze mirrors, iron objects and a whorl shaped jasper object. The over 200 iron objects include daggers, spears, swords, axes, spear-heads, arrow-heads and fishingspears. All of the 12 mirrors and some of the daggers and spears were placed in the main room, the other items were in the sub-room. The mirrors were all imported from China and seven of them were of a style called *sankakubuchi-shinjyukyo* (sacred animal mirrors with projecting rims of triangular cross-section)featuring motifs showing beasts and gods. *San-in* pottery, a style made and used mainly in the *San-in* regions (Shimane Pref., Tottori Pref., etc.), was also found. They were used during ritual ceremonies on the mound.

The seventh survey was carried out from August to December 1994, to clarify the total size and shape of Nishimotomezuka tumulus. It was previously believed that the tomb was a *zenpo-koen-fun* (a keyholeshaped tumulus with a circular rear mound). Latest research has revealed, however, it is a *zenpo-koho-fun* (a keyhole-shaped tumulus with a square rear mound). The forward square mound was not investigated, the size of the mound could only be estimated. It mesuares 50m wide in the rear, 26m wide at the waist, where it joins the forward mound, and is 95m long. A square terrace was attached to the northern face of the forward mound at the waist.

In the region surrounding of Nishimotomezuka tumulus there are several tumuli built during the early phase of the *Kofun* period (4th century A. D.). Most of them also contain *sankakubuchishinjyukyo*. These are assumed to be symbols of the ruling class and thus the excavations of Nishimotomezuka tumulus are significant in many respects to the study of the *Kofun* period.

We intend to clarify the date of construction of the tumulus and the status of the chief inhumed therein, hereafter.

127. The vew of Nishimotomezuka tumulus from the south

報告書抄録

ふりがな	にしもとめづかこふん　だいごじ　だいしちじ　はっくつちょうさがいほう		
書名	西求女塚古墳　第５次・第７次発掘調査概報		
副書名			
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	安田滋（編）　千種浩　松林宏典　石島三和		
編集機関	神戸市教育委員会		
所在地	〒650 兵庫県神戸市中央区加納町６丁目５番１号　☎078-322-5798		
発行年月日	西暦1995年10月５日		

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
西求女塚古墳 （にしもとめづかこふん）	兵庫県神戸市 （ひょうごけんこうべし） 灘区都通３丁目 （なだくとつうさんちょうめ） １番 （いちばん）	28110		34° 42′ 07″	135° 13′ 45″	５次 19930125 ～ 19930910 ７次 19940822 ～ 19941216	５次 443m² ７次 265m²	遺跡の範囲 確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西求女塚古墳	古墳	古墳時代前期	崩れた竪穴式石室 葺石 地震による地滑りの跡	三角縁神獣鏡７面 舶載鏡　５面 鉄製品 碧玉製紡錘車形石製品 山陰系土師器 布留式甕	1596年に起こった慶長の大地震によって地滑りを起こした墳丘とそれに伴って崩れた竪穴式石室を検出。三角縁神獣鏡７面を含めて青銅鏡12面をはじめ、多数の副葬品が出土した。古墳時代前期の古い段階の前方後方墳

西求女塚古墳　第５次・第７次発掘調査概報

1995年10月印刷
1995年10月発行

発行　神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL(078)-322-5798

印刷　日本写真印刷株式会社
京都市中京区壬生花井町３

広報印刷物登録・平成７年度　第123号　A－６類

この冊子は、再生紙を使用しています。